

助成年度：平成 8 年度

[所属] 和歌山大学 システム工学部

[役職] 教授

[氏名] 日下 正基 (近藤隆二郎 金子 泰純)

[課題]

地域博物館としての河川流域空間（リバーミュージアム構想）に関する研究

[内容]

本研究は、特徴のある河川資源に富んでいる和歌山県下河川群を調査提案対象地として設定し、河川流域空間を対象とした「リバーミュージアム構想（以下 RM と略記）」の基礎研究である。河川流域全体を博物館・テーマパークとしてとらえることで、河川流域の一体性（シークエンス／ストーリー）および地域住民の積極的関与が深まることを想定している。基本となるコンセプトはその河川流域がはぐくんできた歴史文化の要素として、水と人間との多様な関係（水文化）をもとに構築する。RM を「新たな流域文化システムを構成するためのしくみ」としてとらえると、流域文化を頂点とした機能構成を構想できる。「収集・保管」機能と「調査・研究」機能が結びつく領域は、流域文化—流域住民（流民）—流域空間が関連する「流域空間システム」、「収集・保管」機能と「公開・教育」機能が結びつく領域は、流域文化—流域住民—来訪者が関連する「流域社会システム」のふたつの大きな流域システムによって RM は構成される。それぞれの体系で得られたデータを最終的には重ねること（レイヤー）で、その相互関係から展示ストーリーを構築できる。本研究では、和歌山県主要河川流域を対象として、各システムに対応した調査分析をもとにして、RM の枠組み再構築と地域固有の特徴を明示し、その可能性について検討した。

流域空間システムとしては、まず「市町村郷土誌における“地域収蔵品、調査」を行なった。この調査は、RM として来訪者に「見せるモノ」の調査であり、和歌山県下各主要 7 河川ごとの歴史文化要素および自然要素に関する記述の一覧項目データベースを関連市町村郷土誌から作成し、河川情報の 4 視点—[こころ Cosmology][しくみ Sociology][しぜん Ecology][わざ Technology]—に基づき分類し、4 視点に重複する度合いが高い要素ほど RM のコンセプトとして適しているとした。また『『蛇伝説』にみる人と水の結合様式に関する考察』は、データベースの活用例として、「蛇伝説」に注目し、和歌山県河川流域の共通マスターコンセプトとして用いる可能性を検討し、各蛇伝説の類型分析および主要 7 河川に連続的な意味づけをデザインし、『紀州 7 蛇物語』として統一化を提案した。

流域社会システムとしては、「和歌山県下自然保護団体の傾向および河川への関係」において、ホスト (host) としての地域住民の参画形態の一つとして、和歌山県下の自然保護団体・環境保全団体 (91 団体) に対してアンケート調査を実施した。回収した 65 団体 (71.4%) のうち 27 団体 (41.5%) が河川を活動対象としており、河川空間への関心は高い。RM におけるホストおよび地域研究員としての可能性を検討した。また、「和歌山県下各学校校歌にみる河川イメージに関する研究」では、和歌山県下全小中高等学校校歌（賛歌）を 506 校分 (98.8%) 収集分析し、302 校 (59.8%) の歌詞に河川が謳われていることがわかった。歌詞に含まれる語句を「河川の詠み表現」により類型化解析を行い、各流域ごとの河川イメージ抽出を行った。RM 演出デザインのテキストとしての利用およびホスト役としての児童・学生の可能性へつなげることもできることを示した。

これらの分析を加えた後に、『川原屋町プロジェクト』について RM 構想を提案した。

以上より、RM 構想の基本的枠組み、基礎的調査手法、演出手法について和歌山県下を対象として検討することができたが、現地のより具体的な検討は今後の課題となった。